

土佐の堅田一族(三)

高知県須崎市吾井郷乙

堅田 貞志

五佐回大高坂の勢傾松王丸
 并遠江房波卷恒事依有
 軍忠為恩賞而充所也
 守支例了被初新之狀
 如件
 曆應三年二月官 推律時
 堅田三郎貞

『佐伯文書』

一宮・大高坂の合戦

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 今月十日 三宮 津野人々打出
 対凶徒等 被致合戦之間 同十二日 馳参高岡館令
 着到 同十八日 一宮合戦之時切捨仕抽軍忠 同廿
 一日 於大高坂城 馳向大手致合戦之處 弓手小カ
 イナ被射矣 其次第三宮 津野人々檢知之上者賜一
 見狀可備後日支証候 以此旨可有御披露候

恐惶謹言

建武三年三月廿二日

佐伯経貞

進上御奉行所

承了

家時

「右読み下し」

堅田小三郎申す。今月十日、三宮・津野の人々
 凶徒等に対し打出し、合戦致さるの間、同十二日
 高岡館に馳せ参じ着到せしむ。同十八日、一宮合
 戦の時、切捨て仕る軍忠を抽す。同二十一日、大
 高坂城において、大手に馳せ向かい合戦致すのと

ころ、弓手の小かいなを射られたる。その次第、三宮・津野の人々検知の上は、一見状を賜り後日の支証に備えべく候。もつてこの旨、披露有るべく候。

十六日に香美郡の深淵城を陥し、大高坂の東の補給路を断つた堅田経貞率いる北軍は、十八日には一宮へ転戦、南軍を追い散らし、東の外廊を打ち破つた。

この時とばかり、その勢に乗じて二一日には大高坂城へと軍を進め攻撃した。

大高坂の守りは堅く、それに南軍の河間次郎光綱が一族の軍兵を引きつれ、大高坂城に救援にかけつたため、益々守りが堅くなり、堅田軍は一旦退き持久戦となった。この戦いで堅田経貞は左手に負傷した事が書かれている。

※軍忠状の中に高岡館とあるのは、一宮尊良親王をお迎えして忠節を尽した弾正光国か、またはその一族の者で、北軍の指揮者のことであると思われる。

八幡山の合戦

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 自最初馳参御方致軍忠之間於今月日以前合戦一見状者 津野孫次郎家時

三宮左近将監頼国被出矣 大將軍御越之御日

同十一日八幡山東坂本仁罷向 抽軍忠之間 抑

御手腰骨被射矣 吉田太郎左衛門尉 長宗加部

一俗広江左衛門尉所見知上者 為向後支証可賜

御証判候 以此旨可有御披露候 恐惶謹言

建武三年卯月十四日 佐伯経貞

進上奉行所 承了(花押)

「右読み下し」

堅田小三郎経貞申す。最初より御方へ馳せ参じ

軍忠致すの間、今月日以前の合戦における一見状

は、津野孫次郎家時・三宮左近将監頼国に出され

たり。大將軍お越えの御日、同十一日、八幡山坂

本に罷り向かい軍忠抽すの間、そもそも御手腰骨

を射られたり。吉田太郎左衛門尉・長宗加部一俗

の広江左衛門尉所見知の上は、向御の支証の為、御証判賜るべく候。もつてこの旨ご披露有るべく候。

三月二十一日の大高坂城の攻撃で、大高坂が予想以外に強いため、一旦撤退した北朝軍は大高坂への援軍を断ち切るため、四月十一日、兵を東に向け、長岡郡八幡山東坂本（岡豊付近）にて南軍と戦った。

この戦いで堅田経貞は、腰に敵の矢を受け傷を負ったことが、この軍忠状にしろざれているが傷の程度はわからない。



岩村城攻め

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 去月廿六日 被寄岩村城時

最前経貞馳向 彼処焼払城廊候了 且時大將軍佐藤六郎殿被見知候上者 為後日支証可賜御一見書候哉 以此旨可有御披露候 恐惶謹言

建武三年五月一日

佐伯経貞

進上奉行所

承了（花押）

「右読み下し」

堅田小三郎申す。去月廿六日、岩村城に寄せらる時、最前に経貞馳せ向かい、彼の処城廊を焼き払い候おわんぬ。且時、大將軍佐藤六郎殿見知され候上は、後日支証ため御一見書賜るべく候なり。もつてこの旨ご披露有るべく候。

四月十一日、長岡郡八幡山東坂本戦に勝利を収めた堅田小三郎経貞は、軍をなお東に進め、北朝軍の佐藤六郎と合流、四月二十六日に香美郡の岩村城を攻め、城を焼き払った。

岩村城の陥落により大高坂への東よりの道は断れた。堅田経貞が四月十一日に受けた腰の傷は大した事はなかったようです。

安楽寺の合戦

『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 今月十三日 押寄大高坂城 致合戦取向城安楽寺之処 凶徒等率大勢 同廿六日寄来御方陣之間 散々致合戦之処 弓手ヒサ口被射矣 クルミノ五郎兵衛 小野彦右衛門尉此之人々存知之上者 為後日可賜御証判候 以此旨可有御披露候

恐惶謹言

建武三年六月廿九日

佐伯経貞

進上御奉行所

承了

(花押)

「右読み下し」

堅田小三郎申す。今月十三日、大高坂城に押し寄せ合戦致し城安楽寺に取り向かう処、凶徒等大勢率い、同廿六日、御方の陣に寄せ来るの間、散々合戦致すの処 弓手ヒサ口を射られたり。クルミノ五郎兵

衛・小野彦衛門尉この人々存知の上は、後日のため御証判賜るべく候。もつてこの旨、ご披露あるべく候。

東の援軍を断つた堅田小三郎経貞率いる北軍は、六月の雨期に入り行動を開始した。

三月二十一日の大高坂城攻めに失敗した北軍は、大高坂城の西方安楽寺に向城を設けた。(向城とは最前線陣地のこと。安楽寺は現在の江の口付近で、天満宮の別当寺、現在の四国八十八ヶ所札所の安楽寺がそうである。)

この安楽寺には、大高坂遠江坊(松王丸の伯父)、有井亦三郎、高北の河間兄弟と一族、東部より応援に馳せつけた和食孫四郎等が、大高坂の西の守りとして布陣していた。

安楽寺に向城を築いた北軍は、六月十三日を期して戦鬪を開始した。大合戦となった。

しかし勝敗はなかなかつかず、戦いは数日間も続いた。ついに両軍がそれぞれ引き上げだし、ついにお預けの状態となった。

この戦いでまた堅田経貞は左手に傷を受けている。傷

を受けると云う事は、最前線で自ら戦っていたという証
であろう。

『佐伯文書』

堅田小三郎申 今月七日 自大高坂城凶徒等寄之間
於安楽寺西大手致軍忠 同十二日 押寄大高坂一城
戸口 致散々合戦候矣 御見知之上者 為向後可
賜御証判候 以此旨可有御披露候 恐惶謹言
建武三年七月十三日 佐伯経貞
進上御奉行所 承了(花押)

「右読み下し」

堅田小三郎申す。今月七日、大高坂城より凶徒等寄
せるの間、安楽寺西大手において軍忠致す。同十二日、
大高坂一城戸口に押し寄せ散々合戦致し候。見知の
上は、向後ご証判賜るべく候。もつてこの旨ご披露あ
るべく候。



『佐伯文書』

堅田小三郎経貞申 今月十日 先守護代河間左衛門
次郎光綱 近藤大炊左衛門尉知国 大高坂松王丸
並遠江以下凶徒等 寄来干安楽寺城之間 於南大手
致散々合戦 中門藤王童左へニサキヲ被射候矣 為後
日可賜御証判候 以此旨可有御披露候 恐惶謹言
建武三年八月十一日 佐伯経貞
進上御奉行所 承了(花押)

「右読み下し」

堅田小三郎経貞申す。今月十日、先の守護代河間左衛門次郎光綱・近藤大炊左衛門尉知国・大高坂松王丸並びに遠江以下の凶徒等、安楽寺城に寄せ来るの間、南大手において散々合戦致し、中門藤王童左へニサキを射られ候。後日ご証判賜るべく候。もつてこの旨御披露有るべく候。

土佐南北朝の戦いは中央部に集中し、河内（高知）平野にこんもりと島のように浮かんだ大高坂山（現高知城）と、その北西、江の口村の安楽寺や久万村の森々にかけて布陣した軍兵、昼夜を問わず起こる軍兵の喚声、馬のいななき、ホラ貝、陣太鼓の音が響きわたること二カ月余り、敵味方入り交じつての攻防戦がくり広げられた。

時に都（京都）の方では、北朝の足利尊氏、足利直義兄弟が九州四国の同志の大勢を得て、三十万余りの大軍を海陸両道より都を指して進んでいた。

（つづく）

